

感情

言語以外の手段でも判断や伝達は可能であり、そのような能力とともに人類は生き延びてきました。

感情は 速度を重視する判断にして伝達手段です。

伝達手段としての感情は言語のみならず表情などの身体表現も伴います。意識のルートのみならず体認のルートも使います。素早く多数の人に認識を伝える(知らせる)手段として、このような技法を人類は発達させたのでしょうか。それは、みずからと他者に同意あるいは共感を求めていることを知らせる叫びです。

このことは共感をあきらめた子供が感情を失うことにも表われています。また 感情が共感に会うと その感情を生ぜしめた事実の記憶は残りつつも感情自体は弱くなったり別の感情に変化したりすることにも、逆に 共感がないといつまでもその内容のままに残ってしまうことにも表れています。

ベルグソンは「笑い」という感情を論理的に分析していますが、すべての感情は同様に分析できます。

感情は過去の認識に新たな認識が加わったときに発生するものです。「予見」(という判断)あるいは「支配可能性」の判断とそれについての「肯否判定」(メタ判断)との複合体です。

つまり、予見(この中には欲求が含まれていることもあります)したのち現実に生じた事象を認識する、ないしは事象を認識したのちその事象に対する支配可能性を判断する、さらにそれらの認識や判断に対して「それでよい(肯定的)」のか「それではよくない(否定的)」のか判定を行う、という構造のものです。

独自の高い目標を抱いている冒険家や技術者はあまり感情豊かではなく、無愛想であったり、計算高い印象を与えたりすることもあります。それは彼らが世界を安易に予測せず、また支配できるとも思っていないからかもしれません。(さらには他人に同意や共感を求めても無駄な状況にあるからでもあるでしょう。)

基本的な諸感情の成り立ちは 次の表のようにまとめることができます。

判断		判定	感情の種類	典型表現
予見の有無	ある	否定的	見切り	「やっぱりな しかたない」
	ある	肯定的	安心	「そう そうだよね」
	ない	否定的	警戒	「あっ いかん」
	ない	肯定的	笑い	「あはっ なんだよ それ」
事象を支配できるか できないか	できる	否定的	怒り	「くそっ」
	できる	肯定的	希望	「よおしっ」
	できない	否定的	悲しみ	「もう どうして」
	できない	肯定的	諦め	「まあ いいんじゃない」

たとえば「さみしさ」という感情は、他の人々とつながれない現実の認識、その現実を変えられないという判断、それら全てへの否定的判定から成り立ちます。つまり「悲しみ」の一種です。

たとえば よくないことが起きた時、それを他人のせいにするるとよけいにつらくなり、「それは自分の責任だ、自分は防ぐことができたのだ」と考えると(悔恨とともに)何らかの「希望」が生まれた経験はないでしょうか。

予見と支配可能性の双方の判断が要素となっている感情もあります。たとえば「幸福感」です。

これは みずからの状況についての「希望」の一種ですが、のみならず、そうなりうる「よくない仮定」がどこかで予見されていなければなりません。その予見に反して「悪くない現在」が発生したという認識が必要なのです。そしてそ

の状況への支配可能性がいくぶんかはあると判断でき、それらすべてへの肯定的判定がなされるという構造です。

逆に、ありうべき「よき仮定」と比べて「よくない現在」が発生し、しかもそれらの事象の支配がほぼ不可能であるという判断への否定的判定が不幸福感(「悲しみ」の一種)です。

客観的には、たとえば豊かな状態や健康な状態というものはありません。幸福とは「幸福感」であり感情なのです。

「よくないこと」の仮定が幸福の前提条件であり、「よくないこと」が仮定できないほど恵まれた状態は、むしろ幸福から遠いのです。

裕福な生活を送る人々が退屈しているのは珍しい光景ではありません。逆に、様々な状況に目標を妨げられているにも関わらず、助け合える仲間にも困まれながら価値があると信じる我慢(消極的なものですが立派に行動の一種)をしている人が活き活きと幸せそうにしているのも、珍しい光景ではありません。

「重要なことは『この国があなたに何をしてくれるか』ではなく、『あなたがこの国に対して何ができるか』だ」と呼びかけたケネディの大統領就任演説もアメリカ国民に幸福を与えるものでした。「何もしなければよくない事情が生じる状況の下、それを自分達が防いでいる」という認識を国民に共有させたからです。「この人についていけば大丈夫だ」と思わせると同時に、「自分が協力してあげないと、この人はダメなんだ」とも思わせました。

逆に、困難を自分ひとりで引き受けようように語る指導者は、たとえそれに成功したとしても、人々に幸福を与えることはできないでしょう。

富の再配分においても、自分の貢献を認められたという形で給付を受けてこそ幸福に結びつくのです。

幸福というものが感情であり、そして感情が判断次第のものであることを考えれば、人は幸福になるため生きているのだとは言えないでしょう。

幸福は人を強くし、不幸は人を賢くします。どちらも自分のありように気づき、変わるための機縁です。

社会も幸福を実現するための装置ではないでしょう。ただし、多くの人々の幸不幸は、社会正義が実現しているか否かの判断材料にはなりません。

感情の生成には「自分」が関わりますが、「自分」はみずからの中に多数あります。

複数の「自分」が同時に働き、肯定と否定が共存して生成する感情は複合的でやや複雑なものとなります(ここでも個人は individual ではなく dividual なのです)。

たとえば、支配可能性について可能と不可能の判断が同時になされ、矛盾的で強力な感情が生じることがあります。

個人的闘争にせよ国家間の争いにせよ、それが暴力の応酬になるほどの激しさをともなうには、よほどのことがないと外部的状況の認識だけでは足りません。他者を攻撃する理由のベースは生存競争ですが「生存のためには無駄な争いを避けることも重要だ」という計算も働くからです。そこには何らかの感情があります。

それも「怒り」や「警戒」などの1つの感情では足りません。「警戒」と「悲しみ」が重なった「恐怖」、「警戒」と「怒り」が重なった「嫌悪」など2つの感情の複合でも足りません。しかし「警戒」と「悲しみ」と「怒り」という3つの感情が重なると、闘争や戦争に至るほどの力を持ちます。

支配可能性があると思うときに生じる「怒り」と、それが無い時に生じる「悲しみ」とは、論理的に両立しえないようにも思われますが、実際には支配可能性があるかないかわからない状況に置かれることもあり、ある状況において一部については支配可能であり他の一部については支配ができないとそれぞれの「自分」が感じるときもあります。そのような場合にはこれらは併存しうるのです。

判定の部分において、肯定と否定が同時に働くこともあります。

たとえば「畏怖」という感情があります。これは予見もできず支配もできないと判断している点では「恐怖」と類似しますが、否定的な判定に終始する「恐怖」とは異なり、肯定的な「むしろそうでなければならない」という判定も含まれます。

「恐怖」は、支配可能性を見つければ「怒り」に転じて攻撃性を誘発します。しかし「畏怖」は、諦念を含むものなので、むしろ受諾を誘発します。

「畏怖」には無意識の自己否定があります。かかる感情が人類に広く見受けられるという事実は「自分をはるかに超える崇高なものは受け入れるべきである」「自分の意識が間違ふことがある」「肉体の持続を超える価値がある」と人類が認めていることを自白しているとも言えるでしょう。

他方、感情に属するように見えて実は異なるものもあります。

たとえば「絶望」は とめどない徒労感が疲労(神経や脳も含めた肉体の使い過ぎや不具合によって機能障害が発生していること)にまでいたった感覚です。疲労については予測も支配も関係ありません。これは感情ではありません。

絶望している人に必要なのは 脳や神経の休養と疲労回復です。徒労をやめる判断の切替えもその手段のひとつではあり、それを促すときに共感が必要ですが、絶望している人が共感を求めている訳ではありません。

逆に このような疲労の回復感は「喜び」となります。これも感情ではありません。

しかし 疲労がなくなる態様のひとつには 予見と支配の可能性が発生するという場合も多く、このようなときは疲労回復感と幸福感が複合しています。このような場合の「喜び」は感情としての側面をもちます。

「楽しい」ということも ミニマルな意味では感情ではありません。

これは(たとえば健康であることや気分が切り替わったことなどで活力が高まり あるいは対象が慣れ親しんだ作業であることなどから)苦労なく(楽に)何かができる状態です。ここには予見も支配も判断もありません。

しかし「楽しい」状況というのは「希望」や「安心」そして若干の「笑い」を生みやすい状況でもあります。よってこれらの感情と混合してしまうことは よくあります。

「愛は感情である」とヘーゲルは述べます(『法の哲学』158 節)。

しかし愛は予見や支配や判断をとまなうものではありませんから 感情ではありません。

著名な精神分析医のスコット＝ペックは「愛は感情ではなく、意志である」と述べます。

確かに 愛は共感とケアを基本的構成要素としますが、必ずしも行為を準備するようなものではありませんし、常に一人でも成立するというものでもないの、意志という日本語は少ししっかりきません。

少し面倒な表現になりますが「愛」とは 共感、自律、貢献をもって他人や世界に関わろうとすることが実現でき 行為規範の調和がとれた状態を意味すること、と定義するのが一番近いように思われます。行為規範についてのメタ理念であり、「正義」が評価規範の調和のとれた状態を意味するメタ理念であることと対比されるでしょう。

愛という状態の実現には 多くの場合には相互の協力が必要です。

相手からの共感とケアがないとき みずからの共感とケアを調和(愛)にできるのは 少数の偉大な人格のみです。共感とケアが相互に交換されるときこそ調和(愛)は生じやすく(同時に幸福感も生じやすく)なります。

しかし これは現実には簡単なプロセスではありません。恋愛を例にとりましょう。

人々の中には 生まれつき調和のとりにやすそうな外見を備えた人(美男美女)もいます。相手の望みや不安を読み取ることに長けた人もいます。彼ら彼女らを みずからの望みをかなえてくれ 不安を消してくれ 共に調和を実現してくれる人だと思い、その相手と過ごす自分像に仮の幸福感をもつ、それが「好き」という感情です。

さらにその相手に具体的な何らかの行為を求めるようになると、それが「恋」という欲求です。

ここまでは一人で成り立ちます。

しかし恋「愛」はその次の段階です。相手の欲求のマトリクスに自分の欲求のマトリクスをすりあわせつつ、全体としての調和をはかろうとする行為であり、そこではみずからの努力もさることながら、相手の協力が必要です。自分との調和を目指さない人との恋愛はなりたちません。これを一人でなんとかしようとするのはアトラスの苦行です。冷たくされても避けられてもアンを大切に思い続けるギルバート＝ブライスは現実にはありえない造形です（ここは「赤毛のアン」の少女漫画的娯楽的側面で、文学的側面ではありません）。

また恋愛を存続させるためには相手の役割を決めつけず、自分のほうを大きく変えねばならないことも普通です。これは生きることにつながる良いことかもしれませんが、楽しいものとはかぎりません。

このように感情はある意味メカニカルな構造のものであり、単純なものなら動物にもあります。感情は人間独自の高尚なものなどではなく、人間性の本質というようなものでもありません。

ただし、感情の発生元である判断には人間独自の複雑さがあり、その個性が現われます。たとえば、共に苦勞している伴侶を「会うべき人に会ったのだ」と考えれば幸福になり、「もっと楽しい生活ができたかもしれないのに」と考えれば不幸になります。

また感情の発露に対する反応にも人間独特の複雑さと個性が表れます。たとえば、予期せぬ成功をなしとげた人と共に笑える人は共感する能力の高い人です。他人の成功を警戒する人はそれが低い人です。

また、動物は現実化した恐怖だけに反応しますが、人間は未来に推測される恐怖にも反応します。たとえば、経済格差が人々の「怒り」をかけているだけならよいのですが、生きる場を失うのではないかという「恐怖」まで生ぜしめるようになると、社会が決定的に分断される危険が高まります。

また、人においては、脳の働きという一個人の反応とそれ以外の事象（外界）の関わり方には、他の生物にはみられないほどの密接で複雑な精妙さがあります。（そのような場を「精神」と呼ぶのでしょうか。）たとえば、脳の扁桃体の活性が低く「恐怖」を感じにくいという特質は、フリークライミングの世界に入ればパイオニアスピリット（先駆者精神）になるでしょうが、ギャングの世界に入れば冷血あるいは精神病質と呼ばれるでしょう。

本質的に判断でありかつ伝達手段にすぎない感情は、コントロールできるものであり、またそうされるべき時も少なくないと言えるでしょう。

「人間は感情の動物である」という言葉もありますが、これは予測の有無が人の行動に大きく影響することを表しているにすぎないと考えべきでしょう。

たとえば、2015年に比べて1975年の日本の主婦はより強い家父長制の軛の下にいたはずですが、しかし離婚率はむしろ半分程度でした。その理由のひとつは、往時は女性達が家父長的家庭を「まあ、こんなもの」と「見切り」「諦めていた」のでそのような状況にも（意外に）平気で耐えられたからでしょう。他方、家父長的習慣はあつてはならないものとされている現代においては、それは「諦め」の対象にはなりにくいでしょう。「家父長的習慣は変えうるもの（支配しうるもの）だ」と考える女性なら「怒り」さえ呼び覚ましてしまうでしょう。そのような状態で家庭生活を維持することは難しいでしょう。

感情は「知」の一例ですが、さらに「知」は多様な形で存在します。

最初から伝達を予定して編集されているような感覚や認識もあれば、そうでないものもあります。

たとえば理念（言語）の旗印のもとに一致団結することが必要な時があれば、いかなる既存の理念も役立たないこともあります。後者のような状況で有用なのは、伝えようとしなくて伝わるような知かもしれません。沈黙の中にも力はあるのです。

さらに言えば「確からしさ」を持ちにくく軽視されがちな認識も、人が生きるうえで重要であることに変わりはありません。

人々の中にも、個々の感覚に従って動きがちな感覚型、伝達にこだわらない認識にたよりがちな直感型、言語を使い慣れた理知型、感情を駆使する感情型、普段は理知型だが見慣れない課題に突き当たると直感型となるタイプなど、様々な性格類型の人々がいます。すべてのタイプが活用される社会こそ多様で強靱でしょう。

認識や伝達の様々な働きの中には、近現代社会において過剰に重視されているものもあれば、軽視されがちなものもあります。しかし いずれも人の精神活動を支える重要なものであり、まだまだ進化していくべきものです。

それらの力を高める方法、限界を広げる方法は狭義の「文化」として継承されています。

その代表が 学問、型(かた)、信仰などです。

次章以下、最後にこれらについて述べておきたいと思います。